乙貞（おとさだ）

第257号　通巻44第6号
令和７（2025）年２月１日発行

守山市立埋蔵文化財センター
〒524－0212　守山市服部町2250番地

TEL&Fax　077（585）4397
Mail　maizobunkazai@city.moriyama.lg.jp

今年は例年より一日早く立春を迎えることから、無病息災を願う節分の行事も２月２日に執り行われます。もともとは、旧暦の大晦日12月30日に行われていた疫鬼、疫神を祓う宮中行事の追儺が世俗化し、豆で邪鬼を打ち払う習俗が生まれたとされています。

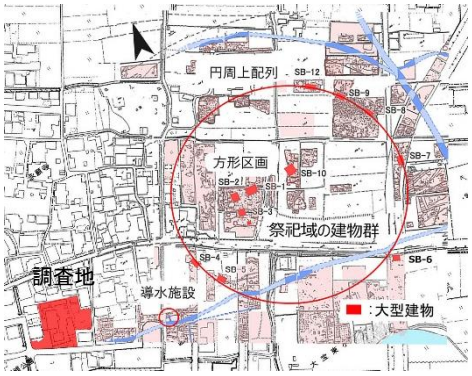
さて、節分の豆まきの原形である追儺も鬼も中国から伝わったとされています。中国の鬼はシンプルに死霊を意味していましたが、日本に伝わるや、土着信仰の祖霊や地霊と融合し、さらには仏教や山岳宗教、陰陽道など、異界や辺境から人間社会に現れては、疫病や災いをもたらす「姿の見えざる隠（おぬ）もの」の観念が次々と上書きされ、その原型が生まれます。また、隠が訛化（がか）し、於爾（おに）と呼ばれ、亡霊の形象文字である鬼の字があてられたと言われています。そして、羅刹天をモチーフに、縮れ毛頭に頭角が生え、憤怒の形相で牙をむく。大柄で筋骨隆々とした風貌で実体化されます。近年来好評を博している「鬼滅の刃」で敵対する鬼はドラキュラのように吸血によって人を鬼に同化させるなど、ハイスペック化しています。今もなお、社会情勢とともに鬼もアップデートされていることがわかります。

ところで、昨年２月号を回顧すると、元旦に発生した能登半島地震の被災を冒頭で慮っています。今年は幸いにも国内ではそのような時事は見当たらず、ありきたりな節分に纏わる鬼の成り立ちを記しました。このような月並みな冒頭文を掲載することが世の平穏の裏返しであるとしたら、今後もずっと、凡庸さに終始できればと願っています。

発掘調査だより

伊勢遺跡第141次調査

1月15日より調査を開始した伊勢遺跡141次調査は伊勢町字伊勢里に所在します。従来からの集落域南辺に位置する宅地と農地2,200㎡の宅地造成工事に先立ち、宅地内道路箇所約200㎡が今回の調査地になります。



調査地周辺を俯瞰してみると、弥生時代後期の大型建物群で構成される祭祀域の西の外れに当たり、調査地東側では、矢板を打ち込んだ土坑2基（下掲載写真）が連結した状態で検出された他、方形の杭列とそこから伸びる溝が見つかっていて、自然流路から水を引き、浄水後に導水路に流す施設、つまり導水施設と考えられています。

あいにく調査地外にも広がるため全容を把握できませんでしたが、今回の調査で何らかの痕跡が見つかるのではないかと期待したいと思っています。

現在は遺構検出を始めたばかりですので、次号の乙貞で結果を報告いたします。（沖田）

阿比留遺跡第６調査のまとめ

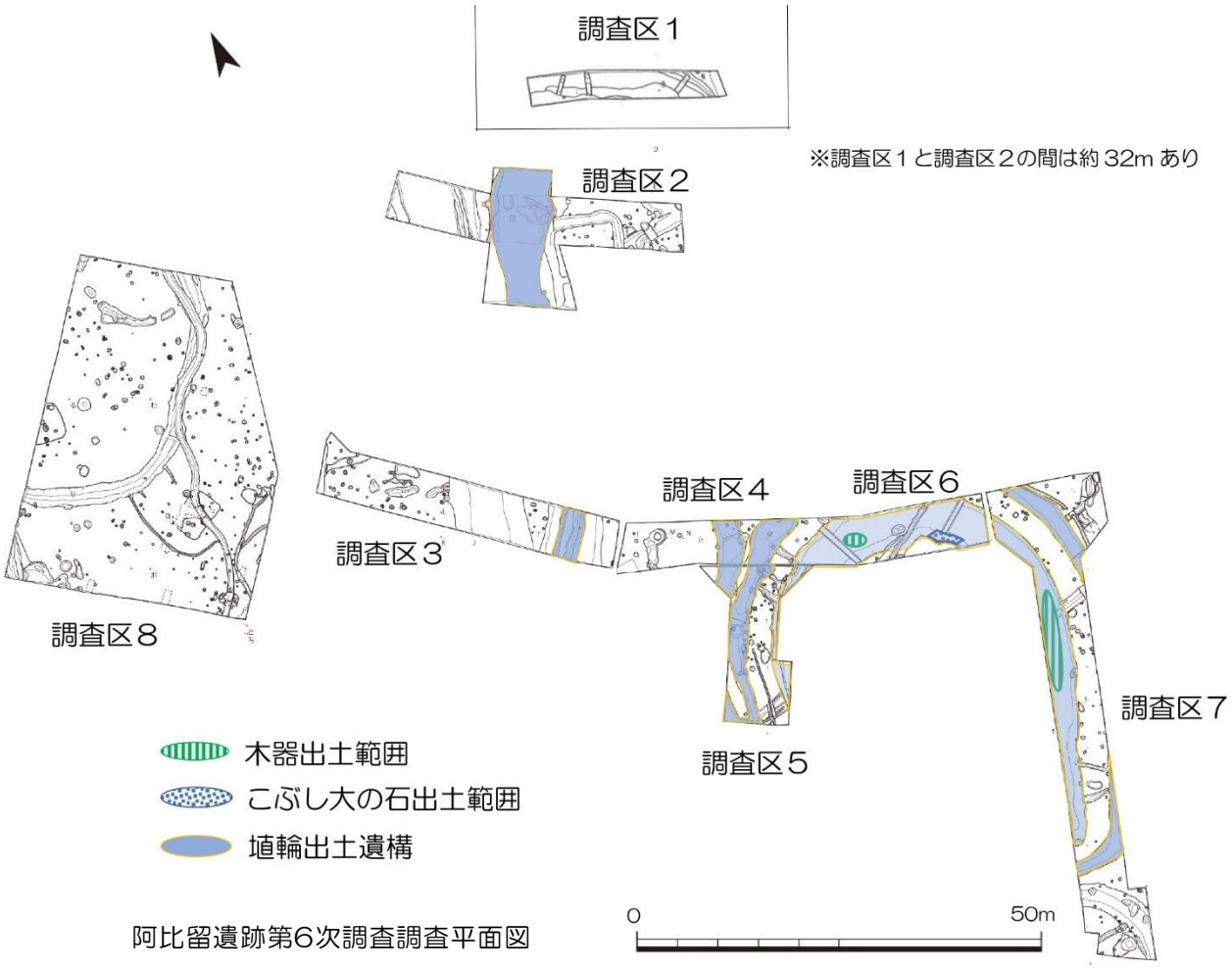
昨年６月より始めた阿比留遺跡の第6次調査は、小島町字塚生における宅地造成工事に先立つもので、約12,600㎡の開発地に8調査区を設け、約2,700㎡の調査を12月末で終了しました。今号では、最終の調査区８の概要と調査全体を総括します。

まず、調査区８（平面図は次頁に掲載）は調整池予定地うち約1,100㎡を対象に調査し、竪穴建物2棟（SI-1,2)、掘立柱建物跡５棟(SB1～5)、円形周溝墓１基（SX-1）の他、多数の溝(SD-1他)や土坑(SK-1他)を検出しました。主な遺構として、竪穴建物と掘立柱建物、円形周溝墓の概要を記します。

【竪穴建物】SI-１は一部調査区外になりますが一辺が4.8mの隅丸方形のプランで、深さ15cmの床面からは柱穴と土坑が見つかり、壺、受口状口縁甕、高坏、器台などが出土しました。SI-２は南北辺約４m、東西辺約5.4mの長方形を呈します。深さ約10cmの床面からは高坏が出土しています。いずれも弥生時代後期の時期が考えられます。

【掘立柱建物】SB-１～5の５棟を検出しています。柱穴の埋土やその方位の差異から３時期の建物で、そのうちSB-２、SB-４からは土師器甕、高坏、須恵器坏身が出土しており、古墳時代中期の建物と想定することができます。

【円形周溝墓】SX-１は、調査区北辺で周溝が断続的に残存する状態で検出しました。溝幅１m～2.4m、深さ15cm～48cmを測り、直径約16mの規模が推定できます。周溝出土の壺、長頸壺、甕、高坏から弥生時代後期の円形周溝墓だと考えられます。

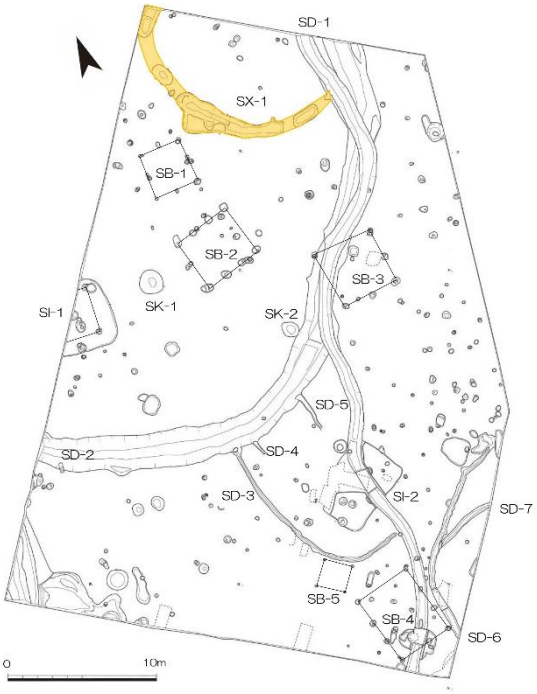


阿比留遺跡第6次調査調査平面図

さて、今回の調査の総括は、検出された２基の古墳跡のうち調査区４～７に及んで検出した1基を特筆すべき成果として挙げたいと思います。本紙254号～256号で既に報告しましたが、この古墳は濠が二重に巡っていて、墳長40m以上、外周濠を含めると60m近い規模の古墳が復元でき、金森遺跡検出の古墳（推定30×40m）や欲賀南遺跡の円墳（直径25m）を凌ぐ、市内最大級の古墳となります。

規模もさることながら、周濠からは円筒埴輪などの形象埴輪の他に笠形木製品や石見型木製品が出土しました。埴輪とともに墳丘に立ち並べられたもので、木製立物あるいは木製埴輪と呼ばれています。笠形木製品は市内初例、石見型木製品は服部遺跡に次いで２例目の出土となります。笠形木製品、石見型木製品の出土は全国的にも稀有で、奈良に次いで野洲川流域に多く、ヤマト王権との深い関係性を示していると捉えられています。

今回の調査を終えて、阿比留遺跡の分布がこれまでの想定より広がること、周辺にはまだ埋没古墳が眠っていることが考えられるようになりました。　（畑本）



調査区８遺構検出平面図

トピックス　TOPICS

令和6年度歴史入門講座最終講となる第6講を12月21日(土)に開催しました。「国宝・宝塚１号墳が語るヤマト王権」をテーマに、松阪市文化財センター所長の福田哲也さんに講演していただきました。

1998～2000年まで調査された宝塚1号墳からは船形埴輪をはじめ、古墳祭祀を考えるうえで欠かせない器財形埴輪が多数出土しています。古墳はすでに国史跡に指定されていましたが、古墳から出土した埴輪278点が昨年8月に国宝に指定されました。

本講座の受講者も関心を示されていることから、この古墳の発掘調査から、この度の国宝指定まで携わってこられた福田さんに、宝塚一号墳とヤマト王権との関係性について言及していただきました。伊勢湾岸はヤマト王権の東国支配を進めるうえでの前線基地、宝塚一号墳の被葬者は王権と深いつながりのある首長であることや、福田さんならではの古墳の発掘調査や出土埴輪にまつわるエピソードを随所に盛り込んだお話は大変興味がそそられました。

第６講開催風景

宝塚１号墳出土船形埴輪（国宝）

福田さん、ご講演いただきありがとうございました。

なお、第6講の開催をもちまして、令和6年度開催の講演会をすべて終了いたしました。次頁掲載のとおり、春季講演会を除き、古墳時代をテーマにそれぞれの研究分野で活躍されている皆さんを講師に開催いたしました。

その結果、約450名の皆さんに参加いただきました。講師の皆さん、受講者の皆さん、大変ありがとうございました。

令和６年度講演会開催の記録

歴史入門講座

第１講　６月15日(土)　「古代王権は琵琶湖をどうみたか」
　講師　細川修平さん（滋賀県文化財保護課）

第２講　７月20日(土)　「埴輪から見た近江の古墳」
　講師　辻川哲朗さん（公財 滋賀県文化財保護協会）

第３講　８月17日(土)　「馬でひも解く古墳時代の近江」
　講師　北原　治さん（滋賀県文化財保護課）

第４講　９月21日(土)　「継体大王と６世紀の近江」
　講師　白井忠雄さん（高島市教育委員会）

第５講　10月19日(土)　「すえものとよばれた土器、須恵器」
　講師　鈴木　茂氏さん(野洲市教育委員会)

第６講　12月21日(土)　「国宝・宝塚１号墳が語るヤマト王権」
　講師　福田哲也さん（松阪市文化財センター）

春季講演会　５月18日(土)
「米と人の関係史～弥生から続く稲作文化を探る～」
講師　妹尾裕介さん
（滋賀県立琵琶湖博物館）

第３講開催風景

第１講開催風景

第2講開催風景

第４講開催風景

第５講開催風景

秋季講演会　11月16日（土）
「古墳時代の塩生産と消費、若狭と近江」
講師　入江文敏さん（関西大学講師）

【後記】鬼といえば、桃太郎か、今村翔吾作品の「童の神」が想起されます。後者の「童の神」は、「今昔物語集」や「御伽草子」採録の鬼退治説話を題材にした作品でしょうが、説話では、大江山の酒呑童子や葛城山の土蜘蛛、古代の東北地方の蝦夷も含め、平安の都からは辺境地に暮らし、中央政権に抗う集団や盗賊などの反社勢力をまつろわぬ鬼（モノ）とし、その帰服を成し遂げた坂上田村麻呂や源頼光が武勲者として語られています。

しかし、一方の今村作品では、迫害を正当化するために中央集権国家に鬼のレッテルを貼られたマイノリティー側の視点から物語が進行します。鬼退治とは、生存権や独自の文化を脅かす謂れのない侵略であり、それに対しての、いわばレジスタンスとして描かれていて、そこには相いれない真逆の論理があります。時代を遡る３世紀、畿内地域に誕生したヤマト王権もおそらく鬼退治のような手法で支配し、版図を広げていったことが想像できます。

鬼と聞いて真っ先に思い浮んだ桃太郎伝説をこのような視座から読み直すと、独自の文化を持った部族社会、あるいは他国に侵攻、略奪した伝承だとする異説も首肯できます。

蛇足ながら、「御伽草子」に収まる鈴鹿の草子で語られる坂上田村麻呂と盗賊の女首領・鈴鹿御前の色恋話を「童の神」では時代に合わせて安倍晴明と愛宕山の女盗賊皐月に置き換えて織り交ぜています。本来なら、ロメオとジュリエットの様な叶わぬラブストーリーですが、この脚色も何事も解決できないことはないという作者からのメッセージなのでしょうか。　（馬耳東風）